**小田桐　孫一 （おだぎり・まごいち）**

**１、プロフィール**

教育者。文芸春秋社を辞して帰郷、以後子弟の教育に専念。弘前実業・弘前高校長を歴任。その間職場同人誌「なるしす」｢鏡陵｣、俳誌「渋柿」を創刊、自ら健筆を揮った。

＜生没＞

1911（明治44）年９月16日 ～ 1982（昭和57）年７月18日

＜代表作＞

随筆集『石の言葉』『風塵抄』『草沢の心』『鶏肋抄』

＜青森との関わり＞

弘前市に生まれる。郷里の子弟の教育に情熱を傾け、弘前市立実業高校長、弘前高校長、藤崎町教育長を務めた。

**２、作家解説**

旧制弘前中学校４年修了で旧制弘前高等学校に進学。同期に小高根二郎、一年上に上田重彦、津島修治（太宰治）がいた。東京大学卒業の翌年、昭和12年文芸春秋社に入社。特派員として満州に赴くなどしたが、19年帰郷を決意、弘前中学校の嘱託教授、のち教諭となる。10月、召集される。24年、シベリア抑留から復員、新制弘前高等学校教諭となる。これより「ダモイ」があだ名となる。

35年、弘前市立弘前実業高校初代校長となり、職場同人誌「なるしす」を創刊。随筆集『石の言葉』（39年）、『風塵抄』（41年）を発行。

45年、弘前高等学校長。ここでも同人誌「鏡陵」、俳誌「渋柿」を創刊。自らも短歌は草雨、俳句は小雅堂・壷木、ペンネーム真木公平で健筆を揮った。

47年、教職を辞し『鶏肋抄』を上梓。52年、藤崎町教育長となる。57年永眠。

｢渋柿園｣９月号、「道標」12月号、58年「鏡陵」が追悼号を組んだ。

**３、資料紹介**

〇随筆集『鶏肋抄』

図書

1972（昭和47）年10月６日

210mm×155mm

弘前高校長として在任中に行なった、入学式や卒業式の式辞などを集めたもの。子供たちに後事を託す真情があふれている。「人間のうた」「照于一隅」「最後の授業」などを主たる内容とし文明からの自然・人間性の回復を訴え感動的である。